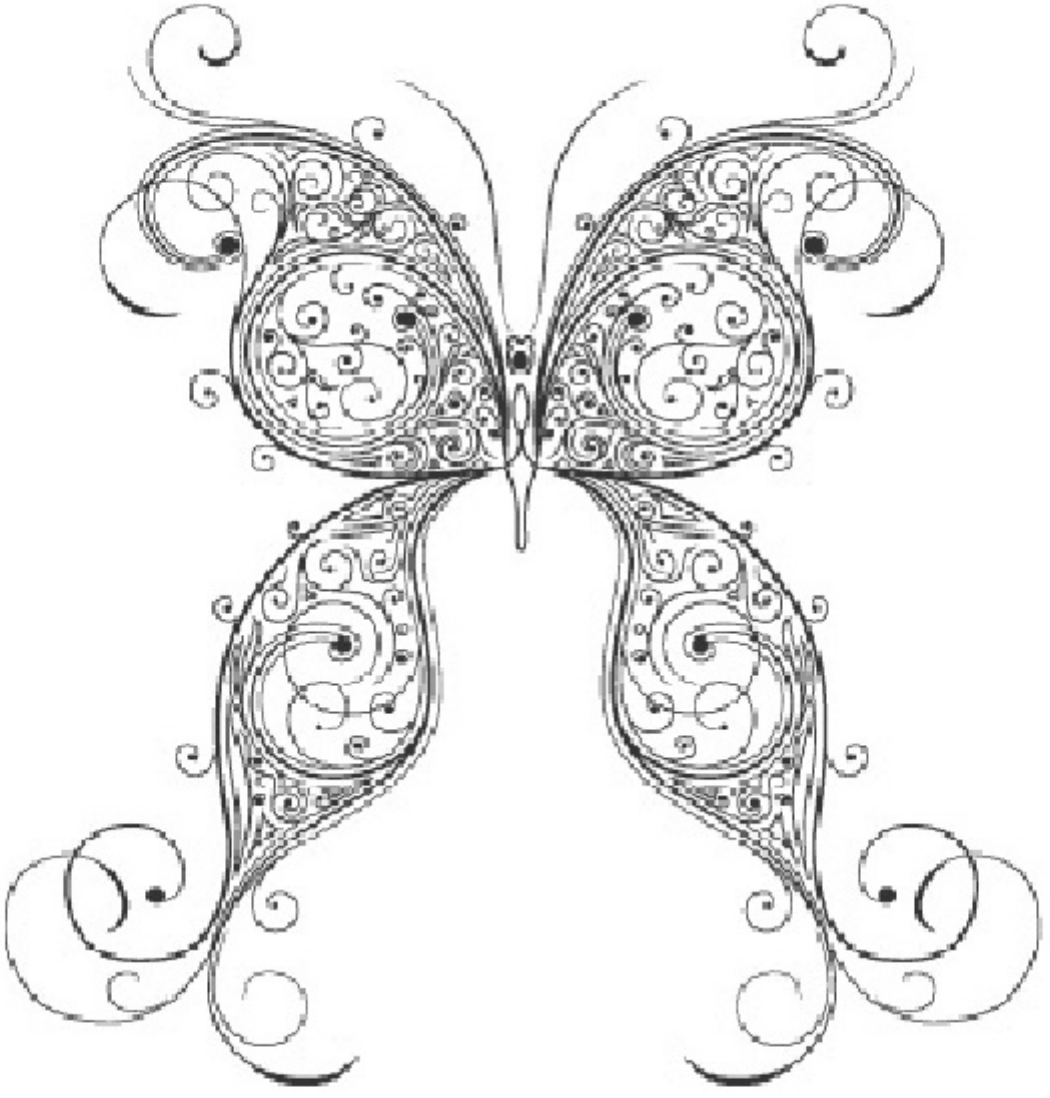
人生の最初に出会った本



堀田耕介

最も影響を受けた本とは生まれて最初に出会った本のことかもしれない。であるとしたら多くの人はその一番大事な本のことは、すでに忘却の彼方にあることになる。

私も気が付いた時にはたくさんの本に囲まれていた。まだ字が読めないころから、母は私たち兄弟を寝かしつけるとき本を読んでくれた。しかし昼間の疲れからなのか、私よりも母のほうが先に眠ってしまう。私は早く字を読めるようになりたいといつも思っていた。

字を覚えてからは母に本を読んでもらうようにせがんでも母が寝てしまったら自分でその先を読み、満足してから寝るよう

になった。小さいころから本は私の一番の友達だった。

そのころ読んだ本はすべて母や父が用意してくれた本だ。その中で記憶に強く残っているのは子供向けのお話の「怖い話」や「とんち話」が載った全集だった。その中の一編として出会ったのが『赤死病の仮面』だった。

エドガー・アラン・ポーのこの作品は赤死病から逃れた人々が城の中に籠り、病魔を忘れるために仮面舞踏会のような乱痴気騒ぎを繰り広げるが、いつの間にか侵入した病魔によって城内もまた死に絶えていくというストーリーだ。読んだのは幼稚園のころだ。

これは「怖い話」の中に入っていたのだが、不思議にあまり怖くはなかった。むしろ人間というものは死ぬものだし、気が狂ったりもするものなのだ、と受け止めていた。そのことと関係があるのか、童話では小川未明『赤い蝋燭と人魚』が好きだったし、テレビ番組では「妖怪人間ベム」や「ウルトラQ」のおどろおどろしさが好きだった。ギリシャ神話でも蜘蛛に変えられたアラクネ、トロイの木馬などが好きだった。知らないうちにそういうゴシックな世界に入り込み、そういう人間観が刷り込まれていたのだろう。

読んだ本は無意識のうちに人生を決定する。すぐ死んでしま

ったり、すぐ狂ってしまったりする人間が、いったいどんな風に生きていけばいいのだろう。今思うと、それは子どもの頃の私にとって大きなテーマだった。

お話の中で嫌な目に合う人は、みな傲慢だったり愚かだったり欲張りだったり、子供の目から見ても人間的に欠陥がある。だからいやな目に合わないためには偉そうにふるまわず、賢く欲を張らず、善良な人、穏やかな人にならなければならないと感じていた。しかし私は親や周りの大人からお兄さんらしくないと言われ、自分はよい人間ではないと感じていた。だからきっといつか、怖いことといやなことが起こるのだと思っていたし、当然いろい

ろな意味で嫌なことはたくさん起こった。むしろいやなことが起こるのが自分の運命だと受け止めていた面があった。

子ども心に私はよい人間になりたいという強い憧れを持っていたけれども、それだけではだめだ、強い人間にならなければいけない、とも感じていた。どう強くなればいいのか。

子どもとしての自分が生きていくうえで最も糧になったのは『ナルニア国』シリーズだった。最初に読んだ『馬と少年』で善く振舞い、勇気をもって行動することが成功へのカギである、という教えを得た。お話の中の子どもたちに憧れ、偉大なライオン・アスランに畏怖を感じながら、ナルニアのすべての話を何十回も読

み返した。

しかし7部作最後の『最後の戦い』はこの世は「本当」の世界ではない、という結論になっていてそれがすごく怖く感じた。それは人間が死んでしまったり狂ってしまったりするものだという観念とどこかで結びついて、人間は本当の世界でないのに本当の世界だと思ってこの世界で生きているのだとか、私はこの世界にいてもいいのかとか、すごく内面的な混乱を抱えてしまったように思う。小学校高学年の時期、表面上は普通の生徒としてふるまってはいたけど、おそらく内的にはそうした狂気を抱えていた。だから中学に入り世界が変わると私の世界は暗転するこ

とになったのだろう。

私は多分、当時すでにたくさんの世界を知っていた。しかしどれが本当で、どれが本当でないのか、見分ける能力はなかった。大人に相談しようにも、こんな相談は誰にもできなかったし、言葉にすることすら不可能だった。信頼できると思った大人や友達に少し話してみたこともあるが、誰も理解してはくれなかった。今少しでもそのころ感じていたことが言葉にできているとすれば、言葉にするのに四〇年近くかかったことになる。

読んだ本は無意識のうちに人生を決定する。人の親である人、親になる人は、子供に最初に与える本は、よく考えたほう

がいい。ただ、よく考えて選んだ本であっても、子供がどのように受け取るかをあらかじめ知ることはできない。物心がついたころの私を見て四〇数年後の私を想像できる人は誰もいないに違いない。

人生の最初に出会った本

http://p.booklog.jp/book/46869

著者：堀田耕介
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/kous37/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/46869

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/46869

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.